

令和 2 年 6 月 5 日現在

機関番号：32621

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2017～2018

課題番号：17H07101

研究課題名（和文）多言語主義をめざした「国家語」という思想

研究課題名（英文）Thoughts of 'State Language' for Multilingualism

研究代表者

西島 佑 (NISHIJIMA, Yu)

上智大学・総合グローバル学部・研究員

研究者番号：40802484

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究は、多言語主義をめざした「国家語」という思想をドイツ語圏、ロシア語圏、日本語空間にまたがってあきらかにしようとしたものである。ドイツ語圏で生まれた「国家語」（Staatsprache）は、2つの経緯を経て日本語に伝わった。1つは、保科孝一や田中克彦を介して日本語へと伝わった経緯であり、いまひとつはドイツ語圏からレーニンによってロシア語に翻訳され、その後1990年代に日本語へと伝わったルートである。こうした歴史的言説のなかで国家語は、法的に制定されることが前提とされ、それを「肯定」する立場、そして「否定」する立場の二面性がある言説の束としてみだすことができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は次のようなものと考えられる。従来の国家語研究とよべるものは、特定地域・空間に関するものが多い。そのなかで、本研究では、複数地域を扱い、そして歴史的・時間的にその解明に迫ったものと位置付けられる。また社会的意義としては、「日本語教育の推進に関する法律」（2019年）が施行されるなど、日本語の法制化がすこしずつすすめられるなかで、「国家語」という言語思想史を通して、その肯定面や問題点を論じたことで、言語の法制化について考察する一助となれたことがあげられると思われる。

研究成果の概要（英文）：This study attempted to clarify the concept of "state language", which aimed at multilingualism, in German-speaking and Russian-speaking countries and Japanese-speaking space. The concept of "state language" (Staatsprache) had been born in German-speaking countries and was brought to Japanese language through two processes. One is the introduction by Koichi HOSHINA and Katsuhiko TANAKA. The other is where the concept had been translated from German into Russian by Lenin and then was brought to Japanese in the 1990s.

In this historical discourse, the concept of state language seemed to be a bundle of two-sided discourses, "affirmation" and "negation", on the premise that it was established legally.

研究分野：言語思想史

キーワード：国家語 多言語主義 国語 ナショナリズム 多文化主義 言語法 公用語 言語思想

1. 研究開始当初の背景

本研究は、多言語主義をめざした「国家語」(Staatssprache)という概念をドイツ語圏、ロシア語圏、日本語空間にまたがってその成立や伝播の経緯を通して明らかにしたものである。「国語」(Nationalsprache)という概念が国民国家と並行的に成立してきたのに対して、「国家語」はドイツ語圏、特に多言語国家であったオーストリア＝ハンガリー二重帝国を中心に成立してきた歴史的な背景がある。

国家語は現在でも旧ソ連地域で使用されている語であり、日本語空間でも90年代以降に学界で使用されるようになってきている。ところが、国家語研究では、特定の地域・空間に関するものがほとんどであり、その歴史的・時間的な経緯の解明が行われていないという背景があった。

2. 研究の目的

本研究の目的は、ドイツ語圏で生まれた「国家語」という概念が日本語へと伝わった2つのルートを通して、その概念を解明することとした。「国家語」は、次の2つのルートを経て日本語に伝わっている。

ドイツ語 日本語(20世紀前半) 忘却(戦後～1970年代) 日本語(1970年以降)

ドイツ語 ロシア語(20世紀前半) 日本語(1990年代)

この2つのルートからその概念を解明していくことが「国家語」研究にもとめられると思われた。とりわけて、特に国家語概念の形成と伝播に大きな役割をはたしたオーストリア帝国のシャルシュミット提案、ロシア語ではレーニンやスターリンの言説、日本語では保科孝一と田中克彦の議論に着目している。

3. 研究の方法

テキスト分析とコンテキスト分析を用いている。解明するテキストは、ドイツ語やロシア語、日本語における国家語に関する一次資料である。ここで「一次資料」とよぶものは、国家語に関する言説がある当時の学術・思想書、公的文書、法的文書、辞典等である。

扱う時代は、上記の2つのルートに対応している。具体的には、18世紀からオーストリア＝ハンガリー帝国が崩壊した20世紀前半のドイツ語圏、国家語がロシア語へ翻訳された20世紀前半以降のロシア語の資料、そしてドイツ語から直接日本語に翻訳された20世紀前半以降の日本語の資料となっている。

本研究で解読した主な資料は、以下のとおりである。

- ・ドイツ語：ヴルムブラント提案とシャルシュミット提案の法案文書。当時の辞典、学術書、ジャーナル等。カウツキーの著作。
- ・ロシア語：レーニン及びスターリンの著作。ソ連の党綱領・法律文書などの資料。
- ・日本語：保科孝一と田中克彦の著作。

資料読解については1つ問題が生じた。それは、すべての言説で国家語概念が定義されているわけではないことであった。そこで明示的な定義がある場合はそれを解読しつつ、定義がない場合は語用のほうに着目することで、その概念を解明することとした。

4. 研究成果

本研究の調査では、「国家語」という概念の系譜を次のように特定している。国家語という語がテキスト上で確認できたのは18世紀のドイツ語圏からである。当初はラテン語を指示していたが、まだ明確な概念として確立していたわけではない。その意味内容が確立したのはオーストリア帝国が二重帝国となった19世紀半ば頃からである。その後、20世紀前半になると国家語は、ロシア語と日本語にそれぞれ伝わることとなった。

19世紀半ば以降の各言語の「国家語」概念は次のような構成要素として解釈できた。

- I) 多言語状況において法的に制定される。
- II) 法律として制定されることについて、肯定/否定の言説の束といえる。

「国語」が法的制定を必要条件とはせず、国民国家においてある言語が「国家の言語」となることがいくらか「自然」「当然」のように感じられている。これに対して、国家語は、オーストリア帝国やソ連といった多言語国家から形成されたため、どの言語が国家の言語となるのかについて政治的な議論がかわされ、そして法律として意識的に成立することが要請される。その上で、法的に制定されることについて、それを「肯定」する立場、「否定」する立場といった二面性が本研究で扱ったどの地域・時代・言語空間においても見受けることができた。これによって、国語が言語の政治性を隠蔽するのに対して、国家語は言語の政治性をあらわとし続ける概念とすることができる。

本研究の主な成果は、2020年度中に「「国家語」という思想：ドイツ圏からソ連・旧ソ連地域、日本語空間への伝播と変容」として公開予定である。

業績

- ・【論文】「国家語」という思想：ドイツ圏からソ連・旧ソ連地域、日本語空間への伝播と変容（上智大学学位論文、2021年見込み）
- ・【著書】友と敵の脱構築 偶然性と感情の哲学試論（晃洋書房、2020年2月）
- ・【報告】ドイツ語圏からソ連・旧ソ連地域への「国家語」の系譜（日本言語政策学会第22回大会、6月7日、神田外語大学）

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 西島 佑
2. 発表標題 ドイツ語圏からソ連・旧ソ連地域への「国家語」の系譜
3. 学会等名 日本言語政策学会
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 西島 佑	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 166
3. 書名 友と敵の脱構築	

〔産業財産権〕

〔その他〕

学位論文「「国家語」という思想：ドイツ圏からソ連・旧ソ連地域、日本語空間への伝播と変容」（上智大学博士学位論文、2021年）
--

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----